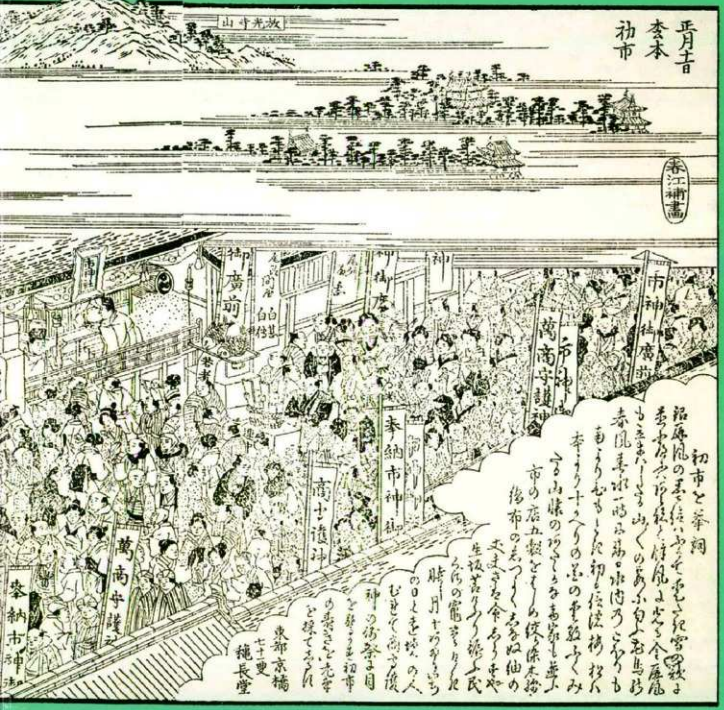
松本城下町跡

伊勢町

～近世・町屋跡の発掘調査～



長野県松本市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成７年２月20日から同年３月27日に行われた松本城下町跡伊勢町地点（長野県松本市中央２丁目345－１他）の第１次発掘調査概要報告書です。
2．本調査は㈱パルコ増床計画に伴う緊急発掘で、発掘調査から報告書作成に至る費用は㈱パルコが負担しました。
3．発掘調査は、㈱パルコと松本市との間で業務委託契約を行い、松本市は現地発掘業務および報告書作成について（財）松本市教育文化振興財団に再委託し、考古博物館が実施しました。なお、業務委託および業務再委託に関する事務については、松本市教育委員会が行いました。
4．発掘調査は、平成７年２月20日から同３月27日まで実施しました。
5．本書の作成は松本市立考古博物館が行い、執筆・編集は主として竹内靖長が行いました。
6．本書の写真撮影は、現場を村田昇司、遺物を宮島洋一が担当しました。
7．本書のイラストは、小原　稔が担当しました。
8．本調査にかかわる図面・写真・遺物などの諸資料は、松本市教育委員会が所有し、松本市立考古博物館（長野県松本市大字中山3738-1・TEL 0263-86-4710）に収蔵されています。
9．本遺跡の調査ならびに報告書の作成については下記の方々・諸機関から多大な御援助、御指導を得ました。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
太田守夫、北野信彦、高山　優、長野県立歴史館、日本民俗資料館、藤沢良祐、松本　健
松本市史編纂室、松本城管理事務所

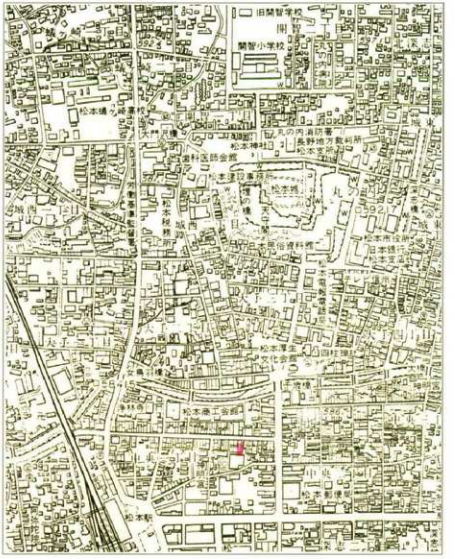
目　　次

はじめに	1
伊勢町は城下町の西の玄関	2
地下に眠る松本のルーツ	4
発見された町人の家のあと	
第４層（16ｃ後～17ｃ前）	8
第３層（17ｃ前～17ｃ中）	14
第２層（17ｃ後～18ｃ初）	20
第１層（18ｃ前～18ｃ後）	26
繁盛の地・松本	34
やきものの美	36
装いの道具	42
暮らしのなかの道具	43
職人・商人の道具	44
漆器・木製品の美	45
変わり行く街並	46
おわりに	47

はじめに

今からおよそ400年前。豊臣秀吉の命により和泉（大阪）から石川数正・康長父子が松本にやってきました。このとき城下町の大規模な整備計画が立てられ、康長の代に松本城天守閣の築造、堀や石垣の整備などが急速に進められました。城郭の築造と同時に、女鳥羽川や薄川の流れも変える大規模な土木工事を行い、城下町も整備されていきました。そして町人町の町割が行われ、方々から人々が集められ、その後の城下町の基礎が形成されました。

現在の松本市の市街地は、松本城の城下町を基礎に発展してきました。松本のルーツともいえる城下町の遺跡は、市街地の広範囲の地下に良好な状態で埋もれています。平成7年、松本市中央西区画整理事業の松本パルコ増床計画に先立ち、松本市教育委員会が発掘調査を実施しました。調査箇所は、江戸時代以来伊勢町と呼ばれている町屋にあたります。町屋の発掘調査例は全国的にも少なく、町人の生活を解明していく上で非常に大きな成果をあげました。本書は、今回の発掘調査の成果の概要を報告するものです。



調査地の位置

伊勢町は城下町の西の玄関

伊勢町は、メイン通りである野麦街道を中心に町が造られています。町屋の範囲は東西475m、南北63～84mで、その北側と南側には所々に寺が配置されています。野麦街道は、本町にT字形につきあたっていますが、これは城下町の随所でみられる防御的なシステムです。また伊勢町の西端には、城下町の東西南北の要所に位置する十王堂（地蔵堂）があり、木戸が設置されていました。小笠原貞慶が整備した初期の城下町では西口と呼ばれていたように、安曇平に向く城下町の西の玄関でした。町の北側と南側にはそれぞれ北蛇川、南蛇川という水路が流れていますが、単なる排水路ではなく、町の南北の奥行きを区画する重要な用途もありました。伊勢町の各屋敷の地割りは、間口2～4間で奥行きが長い短冊型です。この地割りは、現在までほとんど変わることなく受け継がれていました。

伊勢町の由来

宮村町の川辺義正氏所蔵の『寛文九年五月　松本町町割・町号由来記』には、伊勢町由来が次のように書かれています。もともと伊勢町のあたりは西口といわれていました。天正十一年（1583）小笠原貞慶は、亡父　小笠原長時の菩提を弔うため木沢山へ正麟寺を建立しました。木沢の地には古くより伊勢太神宮があったのですが、これを西口へ移し、以後伊勢町とよばれるようになったのです。また一説には伊勢太神宮は、伊勢からやってくる御師（布教する人）がとうりゅうし、布教活動をした田屋（たや：簡単な御神体を奉ってある場所）というものであったとも言われています。

↑　十王堂（地蔵堂）
松本城下町の建設を推進した石川康長が、城郭の鎮護と各地への里程の基準のために文禄年間(1592～96年)に建立したといわれています。

本町

明治元年
南深志町絵図(一部)
故・中村忠雄氏　写
写真所蔵：松本城管理事務所

江戸時代の伊勢町の屋敷割りを細かく描いた絵図はほとんど残っていません。この絵図は明治元年に描かれたものですが、家屋の間口や敷地の広さ、住人などが記載されています。

北蛇川の流れ(H8.1月撮影)

伊勢町

絵図のなかにみられる水色の線は、用水路です。北側が北蛇川、南側が南蛇川と呼ばれ、伊勢町の南北の屋敷地の区画をする用途も兼ねています。このような水路は、中町や本町でもみられますが、伊勢町と同様に町を区画する用途があります。

これらの水路は、現在でも使用されているものが数多くあります。松本の町のなかには、現代の風景にまぎれて江戸時代の生きた遺構がまだまだ残っています。

南蛇川の流れ(H8.1月撮影)

地下に眠る松本のルーツ

土層にみる伊勢町の歴史

土層の堆積状況を細かく観察すると、そこから町の歴史を読み取ることができます。写真は、調査地の土層断面の状況です。

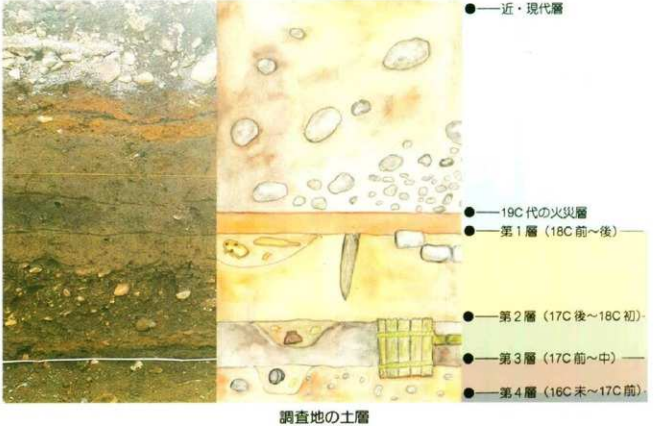
土層の堆積は、自然の堆積であれ人工的な堆積であれ基本的には下の方が古い時期です。松本城が築城される以前の時代は、伊勢町周辺には人が住んでいた痕跡はみられません。川が流れたり、葦などが生い茂る湿地帯で、人が住むにはあまり適していなかった場所であったようです。このため、城下町を整備する時に人工的に盛土して造成したのです。調査地点では、安土・桃山時代から江戸時代の整地層が4層みつかっています。これらの整地層は、湿地を克服するためや、火災・屋敷替えなどにより町が一掃された後に整地されたものと考えられます。調査の結果、築城当時の生活面から現地表面にいたるまでは、170～200cmもの整地が行われたことがわかりました。各層の時期は、遺物・土層などから次のように推定されます。

第1層：18世紀代

第2層：17世紀後半～18世紀初頭

第3層：17世紀前半～後半

第4層：16世紀末～17世紀前半



調査地の土層

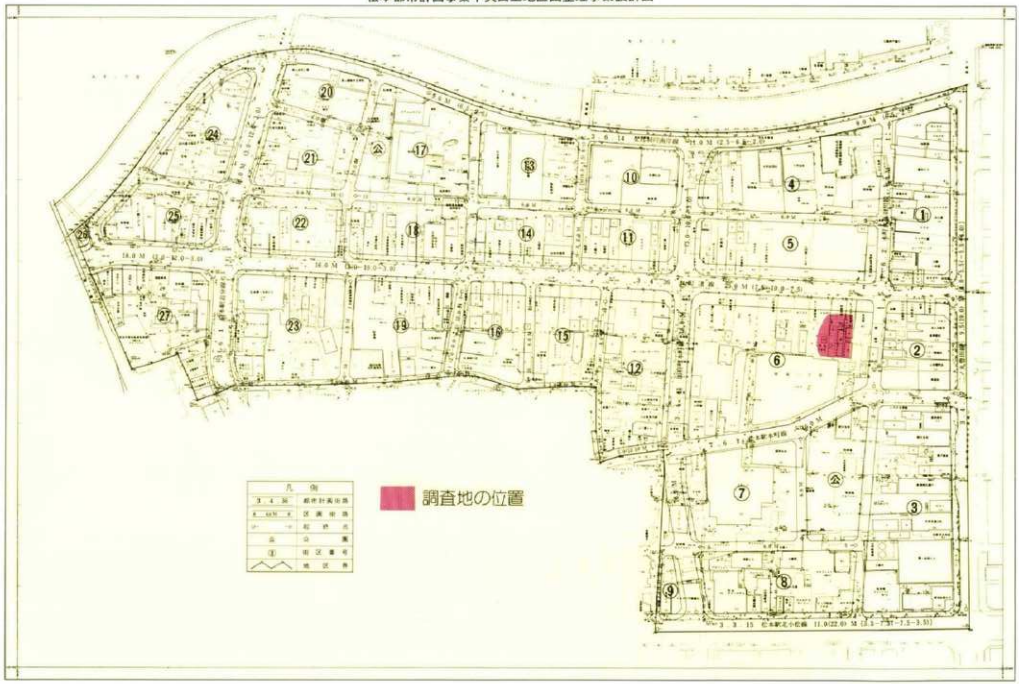
伊勢町の歴史

平成	平成７年（1995）	２月　伊勢町の発掘調査おこなわれる。	
昭和			
大正			
明治	明治21年（1888）	南深志極楽寺より出火。中心部をはじめ、町屋の大半約1500戸、主要施設焼失。	
	明治８年（1875）	本町、伊勢町、博労町、中町、飯田町、小池町、宮村町が合併し南深志町になる。	
	明治元年（1868）	松本町人口11,087人。	
江戸時代	元治元年（1864）	12月伊勢町より出火、53軒焼失する。	戸田氏（６万石）1726～1871
	文久２年（1862）	松本平にコレラが流行する。	
	安政４年（1857）	９月　鍋屋小路より出火、86軒焼失。	
		10月　伊勢町火事、26軒焼失。	
	文化５年（1808）	４月　本町生坂屋より出火、三丁目以北・中町、伊勢町の332軒焼失。再建全久院も焼く。	
	天明２年（1782）	３月　中町裏小路より出火。中町・本町・伊勢町など約330軒焼失。全久院も焼失。	
	延享４年（1747）	９月　伊勢町火事。焼失約100軒。	
	享保５年（1720）	伊勢町浄林寺前より出火。西の木戸まで一丁半両側焼失する。	水野氏（７万石）1642～1725
	正徳５年（1715）	松本町人口8,233人。	
	宝永４年（1707）	松本大地震、全壊178軒、半壊173軒を数える。	
	元禄13年（1700）	松本に疫病が流行する。松本町の病死者485人。	
	貞享３年（1666）	加助騒動がおきる。	
	延宝３年（1675）	松本町中に疫病が流行する。	
	慶安年間	鷹匠町、北馬場町、西堀町、袋町、出居番町などに侍屋敷ができる。	
	寛永15年（1638）	上土町に米蔵をたてる。	堀田氏（７万石）1638～1638
	寛永14年（1637）	松本銭（寛永通宝）の鋳造がはじまる。	松平氏（７万石）1633～1638
	寛永10年（1633）	六九町に外厩をつくる。	
	元和３年（1617）	徒士屋敷、足軽町が設けられる。全久院を創立。	戸田氏（７万石）1617～1633
	元和元年（1615）	この頃までに和泉町、安原町、天神小路、飯田町小池町、宮村町、馬喰町（博労町）などができる。	小笠原氏（８万石）1613～1617
	慶長18年（1613）	伊勢町などの町並みを整備する。	
安土・桃山時代	文禄３年（1594）	このころ松本城天守閣完成か。	石川氏（８万石）1590～1613
	天正13年（1585）	このころから城下町の経営をはじめ、城下町の原形がほぼ出来上がる。	小笠原氏～1590
	天正元年	小笠原貞慶が入城し、深志城を松本城と改める。	

発見された遺構・遺物

土層	時代	遺構・遺物	出土内容
第1層	18世紀前半～18世紀後半	遺構	建物跡 2以上 土坑 24 溝 2 埋設桶 8 鍛冶遺構 1 便所甕 8 杭列 1
		遺物	陶磁器 木製品 (下駄・鍬・箸・漆器・墨書荷札など) 金属製品 (キセル・鋸・鉄滓など) 瓦 (水野氏の家紋瓦)
第2層	17世紀後半～18世紀初頭	遺構	建物跡 2以上 土坑 11 溝 1 鍛冶遺構 1 竹管 1
		遺物	陶磁器 土器 (カワラケ・ほうろく鍋) 土製品 (羽口) 木製品
第3層	17世紀前半～17世紀後半	遺構	建物跡 1以上 土坑 20 溝 1 鍛冶遺構 1 竹管 1
		遺物	陶磁器 土器 (内耳鍋・カワラケ) 木製品 金属製品
第4層	16世紀後半～17世紀前半	遺構	建物跡 3以上 土坑 51 溝 1 鍛冶遺構 1 杭列 1
		遺物	陶磁器 土器 (内耳鍋・カワラケ) 木製品、金属製品

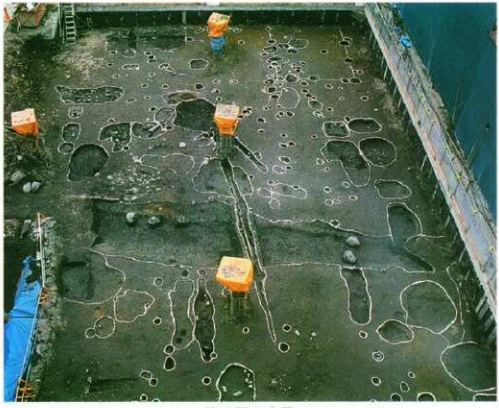
松本都市計画事業中央西土地区画整理事業設計図



発見された町人の家のあと

今回発掘調査をおこなった地点では、安土桃山時代から江戸時代の整地層が４面確認されました。発掘調査では、これらの層を上から順番に剥いで進めていきます。この結果、たくさんの建物跡や使っていた道具などが発見されました。これからタイムマシーンにのって城下町の歴史をのぞいてみることにしましょう。時代はおよそ400年前、豊臣秀吉が天下を統一するころです。

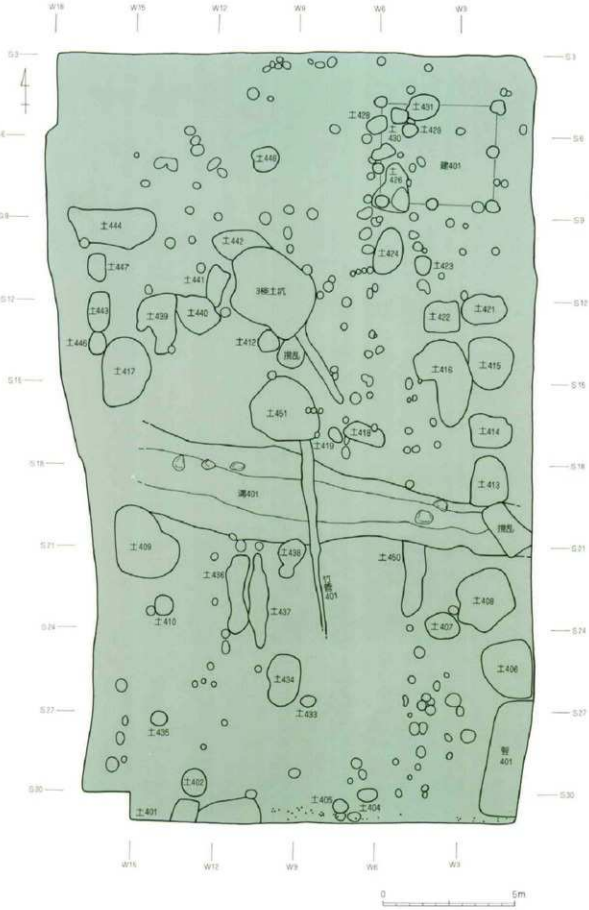
第４層で発見された遺構　（16C後～17C前）



第４層の全景

第４層は最も古い生活面です。時期は、遺物などから16世紀後半から17世紀前半と推定されます。このころの松本の歴史と照らしあわせてみると、天正元年（1572年）に小笠原貞慶が深志城を松本城と改め、城下町の原形を作っていった時代にあたります。第４層の屋敷割は１～３層の様子とは全く異なり、短冊型の屋敷割がみられません。調査中央部分には、幅1.8～3.2mの溝が東西方向に通り、その南北両側に遺構が発見されました。建物の構造は、古代・中世からの伝統的な建築方法である掘立柱式です。伊勢町の他の調査地点の成果では、伊勢町西部にはこの時期に該当する層がみられませんでした。したがって小笠原氏時代の伊勢町は、主として本町側（東側）が先行して形成され、３ページの絵図にみられるような町割が形成されていったのは、石川氏時代以降であると考えられます。

掘立柱建物：地面に穴を掘り、柱を立てて土や石を埋めて基盤をかためた建物


W18
W15
W12
W9
W6
W3
S3
S6
S9
S12
S15
S18
S21
S24
S27
S30
土401
土429
土430
土429
建401
土428
土446
土444
土442
土447
土441
3基土坑
土424
土423
土449
土439
土440
土422
土421
土446
土412
撹乱
土417
土416
土415
土451
土419
土414
土418
溝401
土413
撹乱
土409
土438
土450
土436
土437
井戸401
土408
土410
土407
土434
土406
土433
土435
製401
土402
土405
土404
土401
0
5m

第4層 遺構配置図

第401号建物址

杭　列

P163（建物の柱痕。穴の底には、基礎石が敷いてある。）

第427号土坑（建物の柱痕）

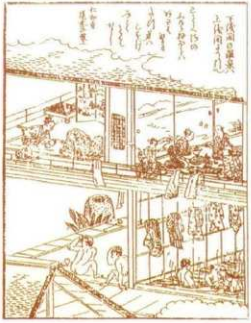
第426号土坑（建物の柱痕）

第409号土坑（ゴミ穴）

第101号溝址

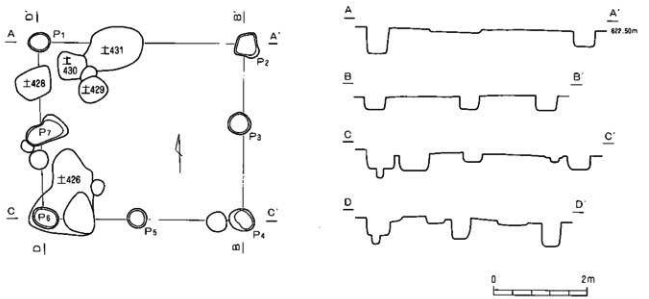
第409号土坑（ゴミ穴）の出土状況（部分）

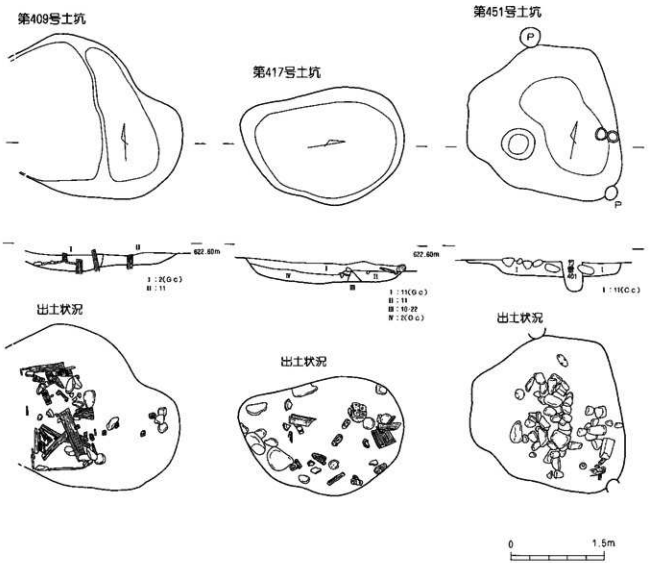
発掘作業風景

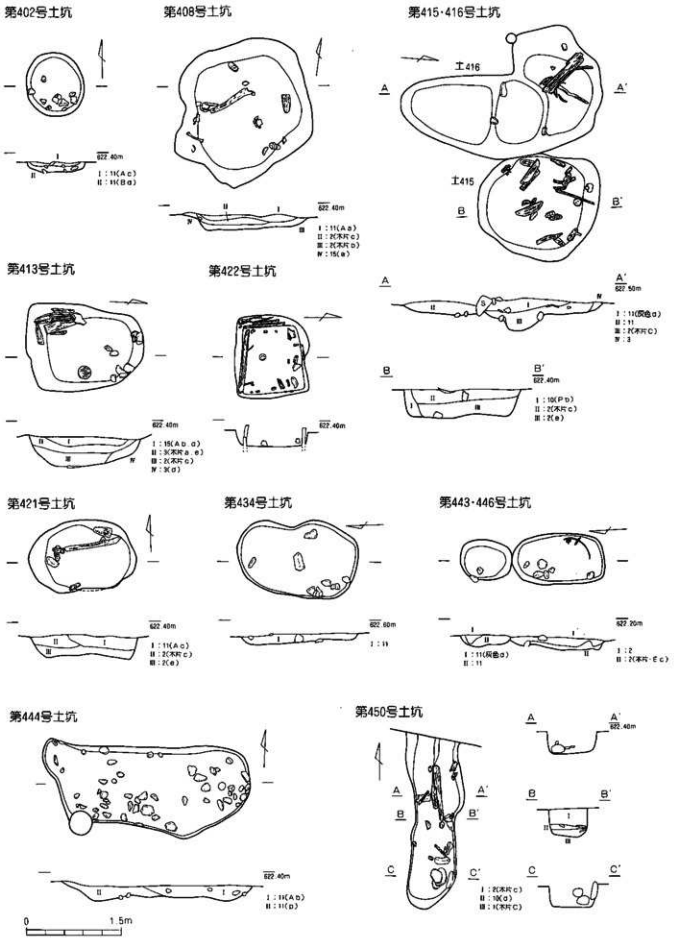


浅間温泉のようす
『善光寺道名所図会』

第401号建物址


A
A'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
土431
土430
土428
土429
土426
B
B'
C
C'
D
D'
622.50m
0
2m


第409号土坑
第417号土坑
第451号土坑
P
622.60m
622.50m
I：2(Gc)
II：11
I：11(Gc)
II：11
III：10-22
IV：2(Gc)
I：11(Gc)
出土状況
出土状況
出土状況
0
1.5m

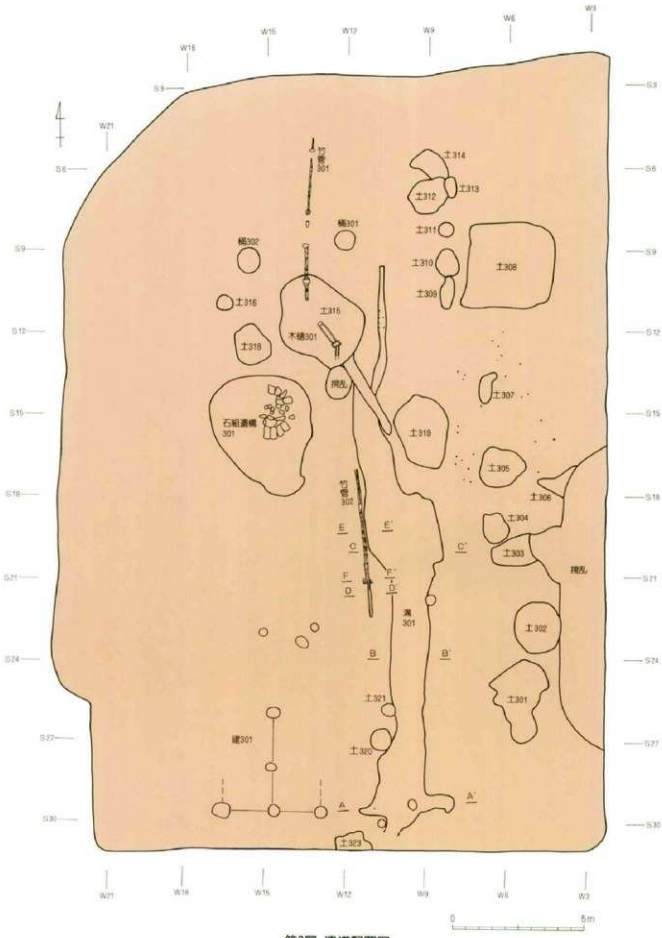

第402号土坑
622.40m
Ⅰ：1t(Ac)
Ⅱ：1t(Bd)
第408号土坑
622.40m
Ⅰ：1t(Aa)
Ⅱ：2(木片c)
Ⅲ：2(木片b)
Ⅳ：1t(e)
第415・416号土坑
土416
土415
A
A'
B
B'
第413号土坑
622.40m
Ⅰ：1t(Aa, a)
Ⅱ：3(木片a, e)
Ⅲ：2(木片c)
Ⅳ：3(d)
第422号土坑
622.40m
A
A'
622.50m
Ⅰ：1t(灰色a)
Ⅱ：1t
Ⅲ：2(木片C)
Ⅳ：3
B
B'
622.40m
Ⅰ：1t(Pb)
Ⅱ：2(木片c)
Ⅲ：2(e)
第421号土坑
622.40m
Ⅰ：1t(Ac)
Ⅱ：2(木片c)
Ⅲ：2(e)
第434号土坑
622.60m
Ⅰ：1t
第443・446号土坑
622.20m
Ⅰ：1t(灰色a)
Ⅱ：1t
Ⅰ：2
Ⅱ：2(木片・Ec)
第444号土坑
622.40m
Ⅰ：1t(Ab)
Ⅱ：1t(b)
0
1.5m
第450号土坑
A
A'
B
B'
C
C'
622.40m
Ⅰ：2(木片c)
Ⅱ：1t(a)
Ⅲ：2(木片C)

第３層で発見された遺構　（17C前～17C中）

第３層の全景

第３層は、17世紀前半～中頃の生活面です。松本城天守閣の築造や城下町の地割（じわり）を行い、松本城下町の基礎を築いた石川氏時代から、小笠原氏・戸田（とだ）氏・松平（まつだいら）氏・堀田（ほった）氏などめまぐるしく城主が交代していた時期にあたります。

家屋の地割（じわり）をみると、４層とは全く異なる南北に長い短冊型の地割りがなされています。この地割りは、時期の新しい上層（１・２層）や、他の調査地点でも確認されていることなどから、伊勢町の地割りの基礎はこの時点で築かれ、その後受け継がれていったものと考えられます。


W21
W18
W15
W12
W9
W6
W3
S3
S6
S9
S12
S15
S18
S21
S24
S27
S30
竹樋301
樋301
樋302
土316
土315
土318
木樋301
石組遺構301
溝乱
土319
竹樋302
土314
土313
土312
土311
土310
土309
土308
土307
土305
土306
土304
土303
土302
土301
溝乱
溝301
土321
土320
土323
建301
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
0
5m

第3層 遺構配置図

竹管のジョイント部分

第301号竹管(水道管)

木樋(水道管)

第301号溝址

第302号竹管(水道管)

鍛冶炉

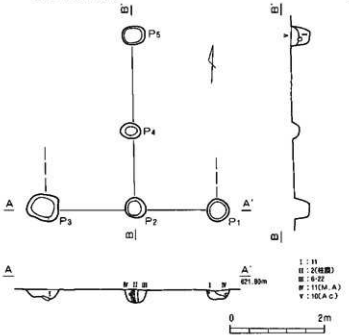
第319号土坑(ゴミ穴)

第305号土坑(ゴミ穴)

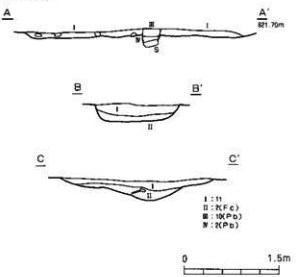
源智の井戸

江戸時代の人々は、飲料水や使い水を井戸や水道（竹管・木樋）から得ていました。左の図は、天保十四年（1843）に刊行された『善光寺道名所図会』のなかに「・・清泉湧出して当国（信濃国）第一の名水とす、・・・」と紹介された源智の井戸です。

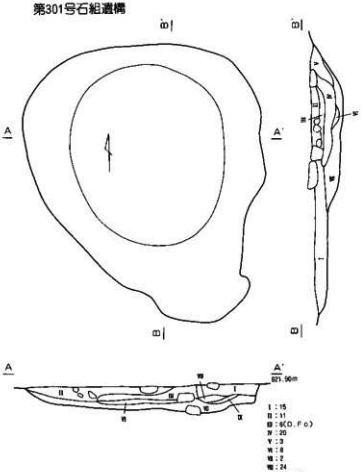
第301号建物址



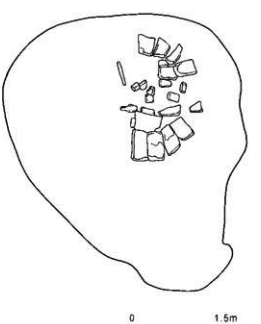
第301号溝址



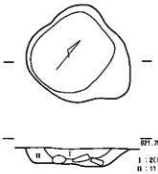
第301号石組遺構



出土状況

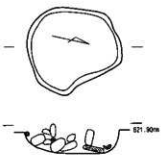


第305号土坑



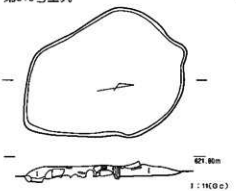
出土状況

第318号土坑

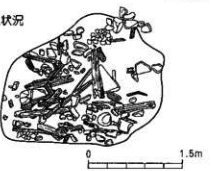


出土状況

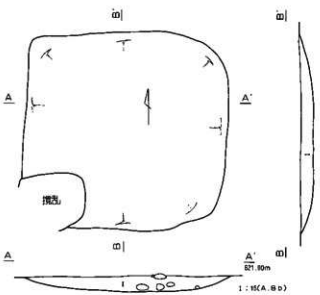
第319号土坑



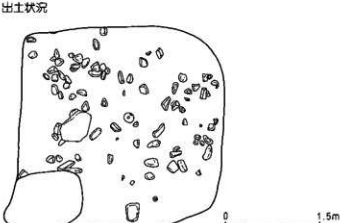
出土状況



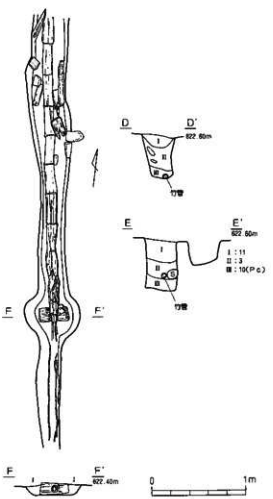
第308号土坑



出土状況



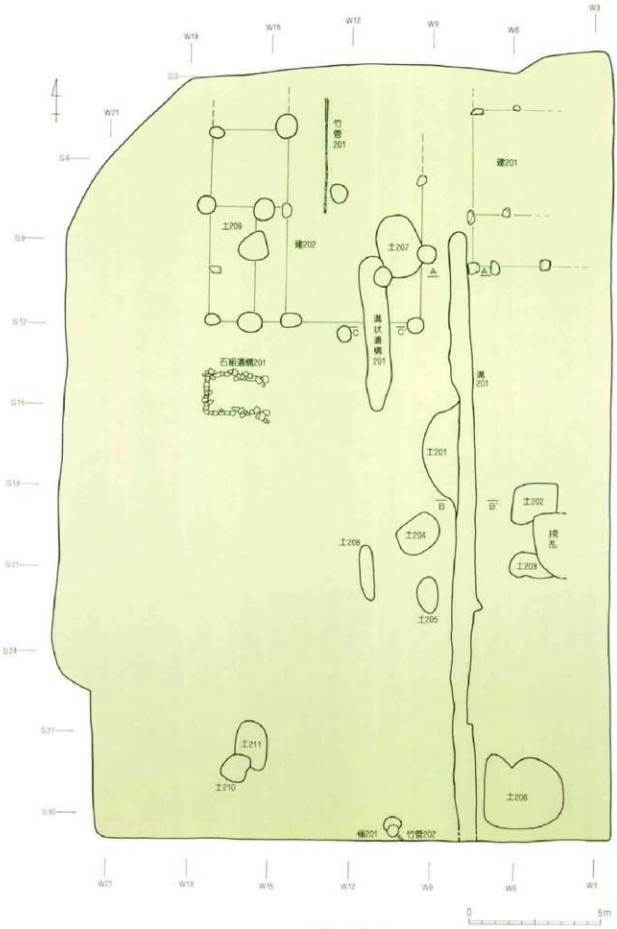
第302号竹管



第２層で発見された遺構　(17C後～18C初)

第２層の全景

第２層は、17世紀後半～18世紀初頭にかけての生活面にあたります。このころは城主がたびたび変わった前代までと違い、水野氏が六代80年の長期にわたる領国経営を行い、松本藩体制を確立していった時期であります。第２層では、建物址・土坑・溝・鍛冶遺構・竹管などがみつかっています。なかでも水道管として敷設された竹管は、過去に調査した二の丸・三の丸では発見されていましたが、町屋では初めて発見されました。これにより、町屋にも水道が普及していたことがわかりました。


W3
W6
W9
W12
W15
W18
W21
S3
S6
S9
S12
S15
S18
S21
S24
S27
S30
竹塀201
建201
土209
建202
土207
A
A'
溝状遺構201
C
C'
石組遺構201
溝201
土201
B
B'
土202
土204
土208
排乱
土208
土205
土211
土210
土206
柵201
竹塀202
0
5m

第2層 遺構配置図

竹管出土状況

石組遺構

石組遺構から出土した漆椀と蓋

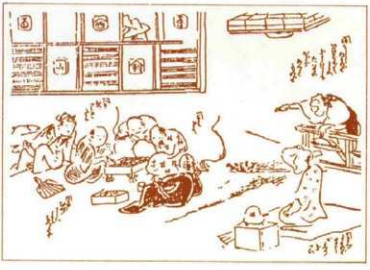
第201号溝址

第201号建物址(礎石)

第202号建物址

第206号土坑(ゴミ穴)

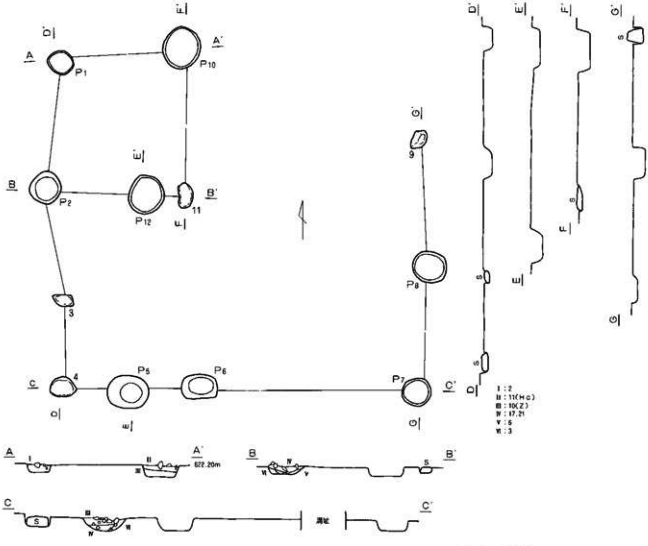
瀦枡と竹管



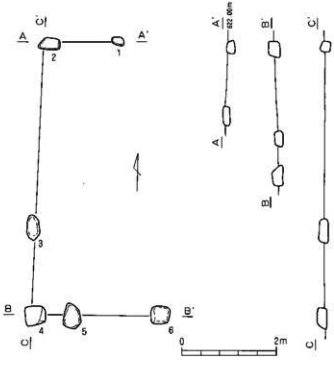
風呂屋でのひとコマ

式亭三馬『浮世風呂』にみえる へぼ将棋の様子。うしろにみえる棚は衣装戸棚。脱衣場の畳の上でさっそく将棋がはじまっています。右側には油を売っている息子を呼びにきた母親の姿がみえます。　　『図録　都市生活史事典』

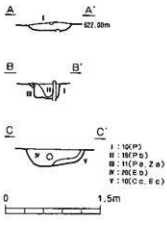
第202号建物址

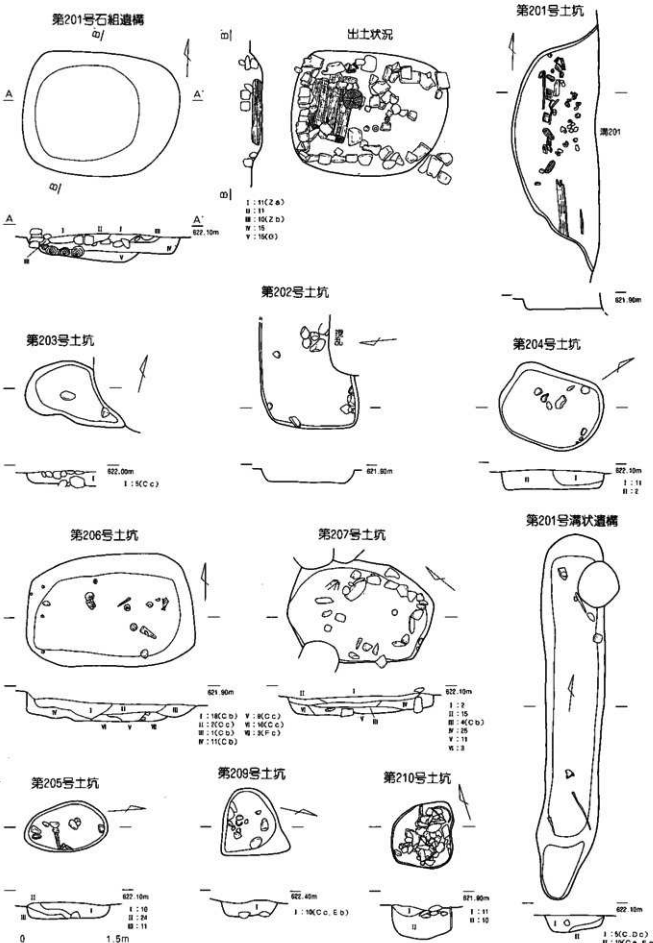


第201号建物址



第201号溝址




第201号石組遺構
出土状況
第201号土坑
溝201
第202号土坑
第203号土坑
第204号土坑
第206号土坑
第207号土坑
第201号溝状遺構
第205号土坑
第209号土坑
第210号土坑
0
1.5m

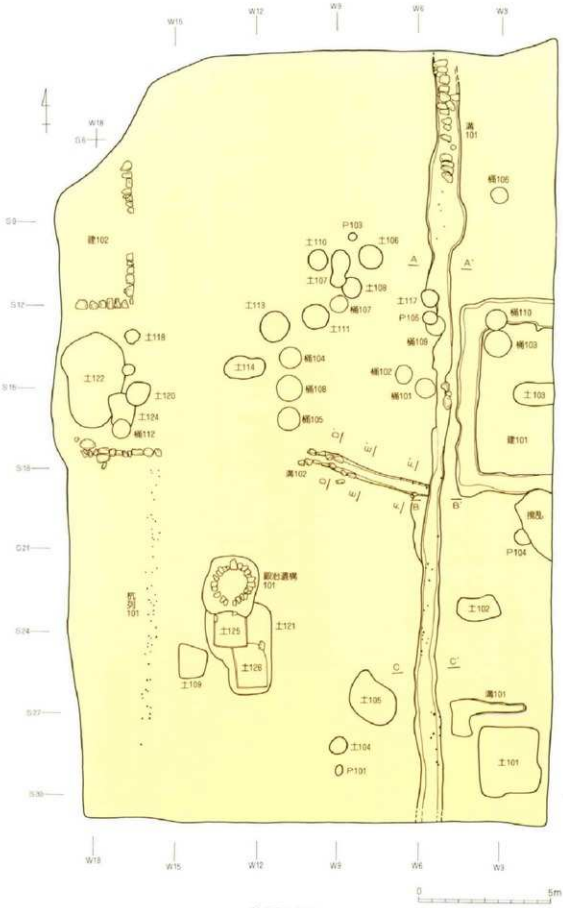
第１層で発見された遺構　(18C前～18C後)

第１層の全景

第１層は、18世紀前半～後半までの生活面にあたります。この面では、３軒分の敷地が発見されました。いずれも、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地です。

このうち真中の敷地（図中の101号溝と杭列に挟まれた部分）は、両隣との境界と考えられる溝や杭列が発見されたため、間口約８間（9.6～9.8m）であることがわかりました。発見された遺構をみると、建物跡、便所甕、ゴミ穴、鍛冶炉、埋設桶などがみられ、ここに住んでいた人の生活・職業までもが推定できます。

また、東側の敷地（図中101号溝の右側）では、ゴミ穴から墨書のある荷札が出土しています。これには小諸や上田などと荷のやりとりを行っていた様子がみられ、町人の活発な経済活動の一端がうかがえます。


W15
W12
W9
W6
W3
W18
G6
S3
S6
S9
S12
S15
S18
S21
S24
S27
S30
溝101
桶106
建102
P103
土110
土106
土107
土108
A
A'
土113
桶107
土111
土117
P105
桶109
桶113
桶103
土118
土114
桶104
桶102
桶101
土122
桶108
土103
土120
土124
桶105
建101
桶112
溝102
B
B'
視孔
P104
柵列101
殺生遺構101
土102
土125
土121
土126
土109
C
C'
土105
溝101
土104
P101
土101
0
5m

第1層 遺構配置図

町人の住宅事情

この復原図は，発掘調査の成果をもとに描いてみました。18世紀前半～18世紀後半頃の風景です。

※　図中番号の説明は29～30ページにあります。

『人倫訓蒙図彙』

鍛冶師

もともと鍛冶師は，包丁・刀・農具・鉄砲などすべてを扱っていたものと思われます。しかし，種類の多さと需要の関係，技術の分化などから，次第に刀鍛冶と農具を主に扱う野鍛冶とに分かれていきました。鍛冶道具としては，金つち，金はし，鞴などがあります。特に鞴は，江戸時代に従来の獣の皮で作った袋鞴からポンプ仕掛の箱鞴に改良されました。　『図録　都市生活史事典』

① 建物跡(基礎部分)

通常、発掘調査で発見される建物跡は、壁や屋根などの家屋部が残っておらず、基礎部分に限定されます。伊勢町はもともと低湿地で地盤が軟弱なため、建物基礎も強固にするため様々な工夫が凝らされてきました。第1層で発見された建物は、基礎部分に幅1～1.5m、深さ0.1～0.3mの溝を掘り、その内部に拳大～人頭大の礫を充填して強固にしています。さらに、その上面に礎石や面知石（石垣などに使う四角錐に加工された石）などが設置され、建物を構築していきました。

② ゴミ穴

松本城下には、約2万人弱の人々が住んでいたようです。城下町のように人口の密集した都市では、現代と同様にゴミの処理が非常に大きな問題でありました。城下町を発掘調査すると、必ずといっていいほどゴミを廃棄した穴が多数見つかります。当時は、大規模なゴミ処理場があったわけではないので、原則として各家ごとにゴミを処理していました。このようなゴミ穴は、屋敷の奥や脇の部分に密集してみつかります。当時の人々にとっては単なるゴミでも、現代の私たちにとっては、まさに貴重なタイムカプセルと言えます。

③ 鍛冶遺構（かじいこう）

調査区中央やや南よりには、石を円形に積んだ遺構と側面を板で囲った穴がみつかりました。この遺構は、底面が赤く焼けており、付近のゴミ穴からは鉄滓（鉄をつくった残りカス）・羽口（火をおこす風を送る土管）・坩堝（溶けた鉄を入れるもの）などがみつかっているため、鍛冶工房関連の遺構と考えられます。

④ 埋設桶(地面に穴を掘って設置された桶)

第1面からは、埋設された桶が8箇所みつかりました。これらは周囲に粘土を貼って、水などが漏れないように工夫されています。中央部分には、3基の桶（桶104・105・108）が並べて設置してあり、その南脇には石組水路がみられることから何等かの作業に使われたものと考えられます。

竹管(竹製の水道管)

調査区北側には、竹でつくられた水道管が発見されました。この水道管は、竹の節を抜き、木製の竿手とよばれるジョイント部分で何本も接合して長距離の配水を可能にしました。発掘調査では、二の丸御殿跡や三の丸の武家屋敷跡などで発見されていましたが、町屋では初めて発見された貴重な例です。18世紀には伊勢町の町人地にも水道が設置されており、私たちの想像以上に水道普及が進んでいたことがわかります。

⑤ 屋敷境の溝

調査区やや東よりには、溝101が発見されました。この溝は、幅1.0～1.2m、深さ20～30cmで、南北に直線的に通ることから屋敷境の溝と考えられます。溝の側面は、崩壊しないように工夫がされています。直径5～8cmの杭を適当な間隔で打ち、板材を杭の間に交互にW形に通して強固にしています。

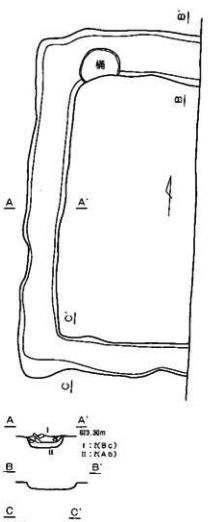
甕が２つ埋設されています。何だと思いますか？
江戸時代のトイレです。

杭　列

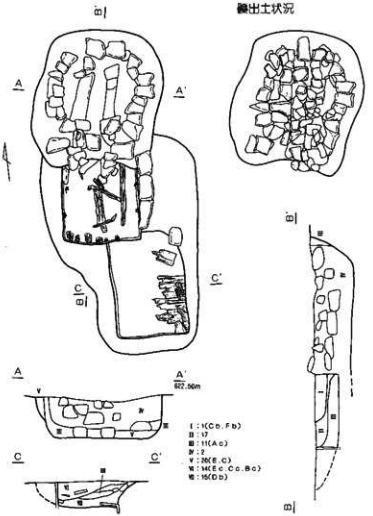
石組溝(溝102)

第102号建物址

第101号建物址

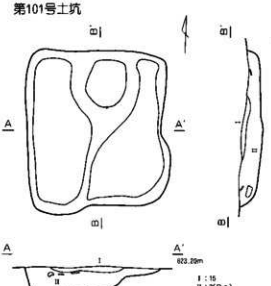


第101号鍛冶遺構

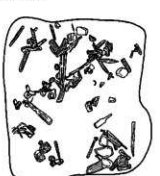


出土状況

第101号土坑

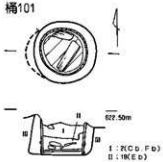


出土状況

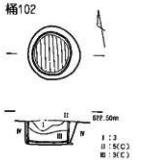


0 1.5m

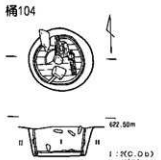
桶101



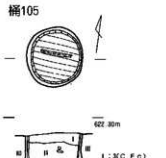
桶102



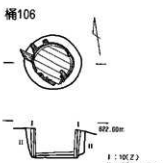
桶104



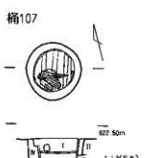
桶105



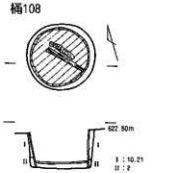
桶106



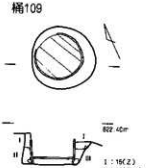
桶107



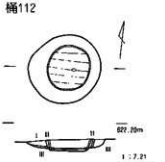
桶108



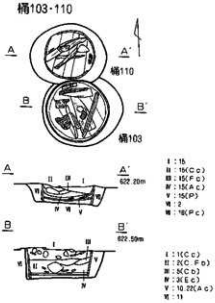
桶109



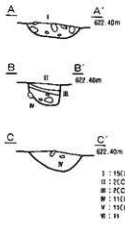
桶112



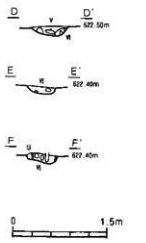
桶103・110



第101号溝址



第102号溝址



繁盛の地・松本

～出土品にみる経済交流～

天保14年（1843）、美濃の豊田利忠が著した『善光寺道名所図会』には松本の町のようすが次のようにかかれています。

「・・・城下の町広く、大通り十三街、町数およそ四十八丁、商家軒をならべ、当国第一の都会にて、信府と称す。相伝ふ牛馬の荷物一日に千駄附入りて、また千駄附送るとぞ、実に繁昌の地なり。・・・」

このように、古文書からは非常に活発な経済活動が行われていたと推定できますが、発掘調査の成果からもその様子をうかがうことができます。

出土荷札にみる流通経済

今回の調査では、文字が残っている荷札が14点出土しました。それらの中には、「小諸本町」「信州上田」などという地名もみられ、活発な流通経済が発達していたことがわかります。中山道・北国西街道・糸魚川街道・三州街道などの交通網が整備され、馬などによる物資輸送（中馬）も活発になったので、広範囲な物の流通が可能になったためと考えられます。

表

小諸本町
布屋定吉様
イ一弐百十八

御国屋
吉兵衛

裏

〈木
無地弁当弐束
朱粉〇〇弐束
〇内〇〇〇〇弐束
〆八束

第1層土101出土（18世紀代）

表　裏

表

○信州上田　加茂屋利兵衛荷

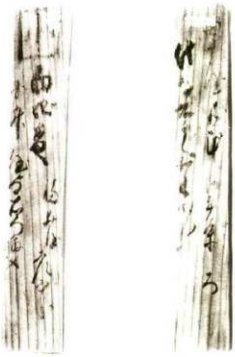
二　よ路寿や　勘助殿行

裏

二　本仕入嘉世八束

第1層出土(18世紀代)

表　裏



表

小

百四番　福井屋彦五郎

小升屋与右衛門殿入

裏

四ツ屋　本○平茶　ろ

代　百六十五匁五分

第1層出土(18世紀代)

やきものの美

～遠くから運ばれてきたやきもの～

出土品のなかで最も量が多いのが“やきもの”（陶磁器）です。これらは、瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）・肥前（佐賀県）・信楽（滋賀県）など全国各地の生産地から運ばれてきたものです。このうち、特に瀬戸・美濃・肥前産が多くみられます。

瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）産

青織部　菊文皿

志野織部皿

黄瀬戸皿

織部向付

志野織部皿

灰釉香炉

御深井釉摺絵碗

御深井釉小碗

御深井釉水滴

御深井釉仏飯具

青織部蘭竹文皿

灰釉丸皿

木

拳骨茶碗

高台底裏に刻印がみられます。

合

キ

肥前産（佐賀県）陶磁器

染付　鉢

染付　吹墨皿

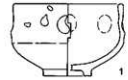
染付　蓋

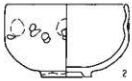
染付　湯のみ椀

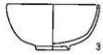
唐津　向付

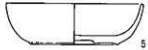
唐津　鉢

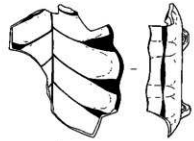
第1層 (1～5)



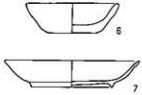


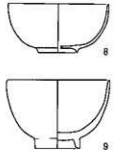


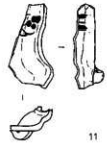


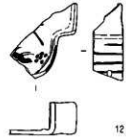


第2層 (6～12)

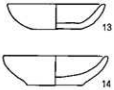


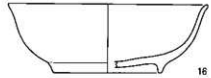




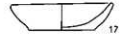


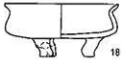
第3層 (13～16)

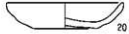


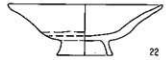


第4層 (17～22)





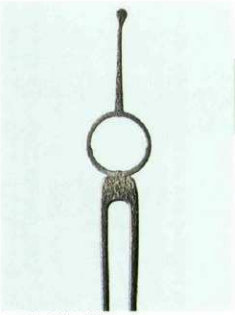




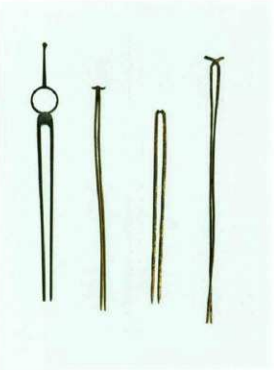
陶磁器実測図

装いの道具

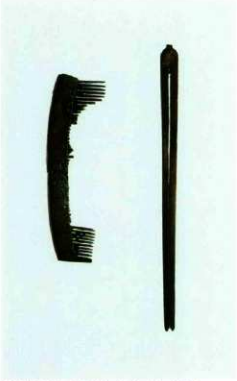
～江戸のおしゃれ～



右写真左端の模様
銀製で細かな細工がみられます。
先端部には耳かきも付いています。



かんざし



木製のくし(左)とかんざし(右)

キセル(左右セットではありません)

暮らしのなかの道具

～庶民文化の香り～

灯す

あかりを灯す灯明皿
（皿に油を入れ、芯をおいて火をつけます）

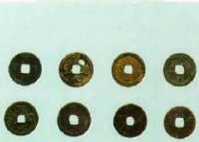
履く

煮る

鉄鍋の破片

内耳鍋

買う



寛永通宝

職人・商人の道具

～つくる・商う～

（表）

富山屋

（裏）

前栽鑵

鑵…錠前の意

のこぎり

石製印鑑

上面

下面

分銅（おもり）

「天下一」と刻印がある

釘

鍛冶屋

フイゴ羽口（左）とルツボ（右）

漆器・木製品の美

模様のある漆椀

第4層出土　漆椀

底に記号がある

漆　椀

木製の人形

漆　椀

変わりゆく街並

～写真にみる街の変遷～

明治32年　菅公一千年御正忌大祭（4月22日～4月26日）の伊勢町（本町から西方を望む）

（写真・日本民俗資料館　所蔵）

昭和4年12月の伊勢町一丁目（本町から西方を望む）

県内初めてのアスファルト道路である。街灯柱は、昭和天皇即位を記念して作られたもの。

（右が金鈴堂、左が池上呉服店）（写真・日本民俗資料館　所蔵）

現在の伊勢町

平成8年2月の伊勢町（本町から西方を望む）

おわりに

国宝松本城は、16世紀末に天守閣が造営され、以来松本の歴史的発展の象徴として今日に雄姿を残しています。築城以来400年間、江戸時代から現代まで発展してきた歴史は、数多くの文献史料からもうかがえますが、地中に埋もれた遺跡からは、これまでにわからなかった江戸時代の暮らしの様子を窺い知ることができます。しかし、市街地再開発により、新たな発展を遂げようとしている松本では、すでに多くの埋蔵文化財が失われており、遺跡の発掘調査・記録・保存は、急務の課題と言えます。

今回の発掘調査では、本書で紹介したように近世の遺構・遺物が非常に良好な状態で発見されました。これらの成果をまとめた本報告書により、江戸時代の人々の暮らしや松本の歴史について多少なりとも理解を深め、関心を持っていただければ幸いです。

今回の発掘調査および報告書作成にあたっては、㈱パルコ、㈱戸田建設をはじめ関係機関のご理解・ご協力があり、多大な成果をあげることができました。記して謝意を表します。

《参考文献》

松本市史　第２巻歴史編Ⅱ　近世　松本市　1995

信濃史料叢書　第21巻　信濃史料刊行会　1973

長野県史　近世史料編　第五巻（二）中信地方　長野県史刊行会　1969

松本の町名　松本市　1969

お城がすき　まつもとが好き ― 松本城をめぐる文化財　松本市教育委員会　1993

歴史のなかの松本城　松本市　1993

松本城の歴史　日本民俗資料館・松本市立博物館　1889

松本城三の丸跡 ― 土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報 ―　松本市教育委員会　1993

日本職人史Ⅱ　職人の世紀上　遠藤元男　著　雄山閣　1991

美濃窯の焼物　多治見市教育委員会　1993

江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ　江戸陶磁土器研究グループ　1992

季刊　考古学　第53号　江戸時代の発掘と文化　雄山閣　1995

城下町の考古学　東京都港区立港郷土資料館　1994

国内出土の肥前陶磁　佐賀県立九州陶磁文化館　1974

別冊太陽　古伊万里　平凡社　1992

美濃焼　田口昭二　ニュー・サイエンス社　1985

肥前陶磁　大橋康二　ニュー・サイエンス社　1989

松本城下町跡　伊勢町　第1次発掘調査報告書抄録

ふりがな	まつもとじょうかまちあといせまち
書名	松本城下町跡伊勢町
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.122
編著者名	竹内　靖長
編集機関	長野県松本市教育委員会　（松本市立考古博物館）
所在地	〒390　長野県松本市丸の内3番7号　（松本市大字中山3738－1　TEL 0263－86－4710）
発行年月日	平成8年（1996）年3月21日　（平成7年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積	調査原因
まつもとじょうかまち 松本城下町	ながのけんまつもとし 長野県松本市	20202	50	36′ 13′ 42″	137′ 58″ 7″	960220～ 960327	920m² ×4面	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松本城下町	城下町	近世	建物址　8 土坑　106 溝　5 ピット　196 埋設桶　11 鍛冶遺構　3	陶磁器：瀬戸・美濃産、肥前産、京都産ほか 金属製品：銭貨、煙管、鉄鉱滓、ほか 木製品：下駄、曲物、漸椀、ほか 石製品：印鑑、石臼ほか	

松本市文化財調査報告　No.122

松本城下町跡

伊勢町

～近世・町屋跡の発掘調査～

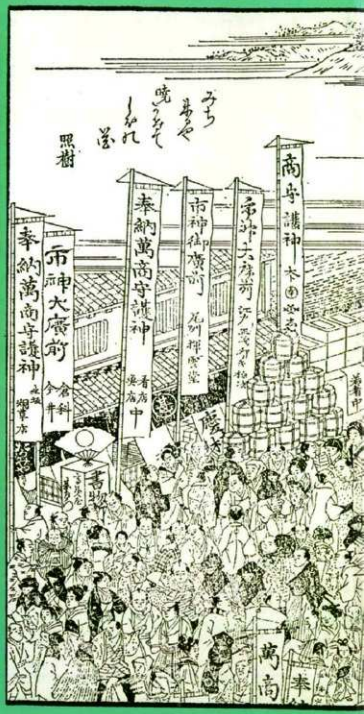
発行　平成8年3月21日

発行者　松本市教育委員会

松本市丸の内3番7号

印刷　川越印刷

松本市文化財調査報告　第一二二集



松本初市のようす
「善光寺道名所図会」より